自己開発としての幼児の教育

古庄　高

一　映像文化の意味するもの

今日の幼児の教育について語ろうとすれば、戦後の物質文明が子どもの生活にもたらした急激な変化をまず第一に考慮しなければならない。その変化は今も続いており、恐らく今後も益々激しさを加えるであろう。生活環境は、教育的にみて、子どもが幼いほど直接的かつ強力な影響を及ぼすに違いない。またその影響も、子どもの周辺にある具体的な事物が変わるという物質的側面ばかりでなく、物質文明が子どもを取り巻く大人たちの世界観や価値観を変え、それが更に有形無形の影響を子どもに及ぼすという点も見逃せないところである。子どもの生活環境は多くの研究者がいろいろな角度から既に指摘しているように、この二十五年の間に様相を一変してしまった。この変化の大きさは一般の人々でさえ、実感としてはっきりと感じることができるばかりでなく、人間存在の本質に深く関わる問題を含んでいると思われるので、まずその点について簡単に述べてみよう。

生活の変化の実感は、人間存在全体における身体の位置が変化したことに基づいているのではないだろうか。すなわち、かつて身体は生活を営む上で不可欠の機能を果していた。生活上の行為は何事も自分の身体を用いて遂行していたのである。身体が道具的性格を強く持っていた、つまり、身体は主体の思考や意志を実現するための手段であったと言える。しかしそれは必ずしも身体が人間にとって非本質的な価値あるいは従属的な価値しか持たなかったというわけではない。なぜなら身体は意識的行為の遂行に対し、世界についての無意識的・潜勢的な知を提供し、それが背景となって行為全体の布置構造を支えているからである。身体は我々を取り巻いているあらゆる存在に方向や距離を与える座標軸の中心である。たとえ背後にある、目で見ていないものでも、身体はその事物の方向、事物の距離等について暗黙の了解をし、自己の身体を中心に無意識的な地図を描いているのだ。その意味で身体は主体の側に属しているのである。ところが近年の生活様式の変化は、身体の道具としての役割を著しく減少することとなった。日常生活を営む上で、身体的な技術や知識の果す役割は、もはや極めて限られたものでしかないと言えるだろう。行為を遂行する為の手段・道具としての身体から、可能な限り不快感を避け、最大限の快適さ、便利さを享受する受益者としての身体へ、立場を変えたわけである。主体の意図に従って事物に働きかけるという能動的性格から、快適さを享受するという受身的性格の方へと重点が移行することによって、身体は人格的主体から離れ、人格的主体と並んで身体独自の欲求を主張する、いわば身体的自我の領域を確立するに至っている。恐らく現代人ほど身体的不快感を怖れ、身体的欲求に左右されるようなことは、以前にはなかったのではないだろうか。物質文明により身体を使う機会が少なくなればなるほど、身体機能は衰

え、逆に身体的欲求が人格全体に対して大きな比重を占めるようになる。自分の健康への関心の高さがそれを示している。物質文明以前には、身体を道具として用いる過程で身体は鍛えられ、同時に身体的欲求に負けないだけの抵抗力が身についたであろう。それが現代においては、身体は精神から独立して精神と同等の、あるいは同等以上の地位を築いているのである。今日の大人が抱く生活の変化の実感は、自己の身体が道具としての身体から快感の享受者としての身体へ移行したことに基づいており、それ故自己の存在そのものに関わる重要な実感なのである。

生活の中での身体の役割と同じく、子どもの生活や環境そのものも、大きな変化を遂げている。その内容を見てみよう。[1] まず今から二十年前（昭和三十年代後半）というのは、丁度テレビの普及台数が日本の家庭の半数以上に達した時期である。テレビ以外の家庭電化製品の普及も、それまでの日本の家庭生活の様式を根底から変えた大きな要因である。子どもの文化、精神構造、遊びに重大な影響を与えたという点でテレビが最も注目を集めるところであるが、便利で快適な家庭電化製品の普及は母親の家事労働を軽減したのみならず、手伝いというかたちでの労働から子どもを解放することになった。このことが子どもの成長にとっていかなる意味をもったか速断はできないが、子どもの生活全体も社会の変化の流れに巻きこまれたと言える。子どもの生活の変化を、手伝いからの解放と遊びの二つの面から考察することにする。

労働からの解放は確かに自由時間の増加につながるという肯定的な意義もあるが、他方では人間が自然の中で、自然と調和しながら築きあげてきた生活の営みについて学ぶ機会を、子どもが失ったことも意味している。家庭生活そのものが電化製品の普及を通じて簡素化され、自然との関わりを失いつつある情況に加えて、子ども自身はそれ以上に生活の営みから疎遠になっている。水汲み、草とり、家蓄の世話などといった、かつての子どもの仕事が姿を消したのは戦後間もない頃であろう。今では食器を洗ったり洗濯物を畳むことすら稀になっているのである。従って子どもの生活時間は遊びか勉強に割り当てられているのが現状である。ところが元来、子どもが外界について直接経験によって学ぶというとき、それはひとつは家事労働への参加（手伝い）を通じてであり、もうひとつは遊びを通じてであった。手伝いが不要になった今、直接経験の機会を担うのは遊び活動だけであるが、後述するように最近の子ども達の遊びは、遊びのもつ直接経験の側面をほとんど有していない。

直接経験は手伝いや遊びの活動の中で、事物に直接触れ、工夫し、何かを為し遂げることによって、つまり実生活を体験することによって得られる。それは身体を通し、感覚を通して外界から直接的に多くの事柄を学ぶ行為であり、具体的な個々の体験の中には総合的な判断力や体のバランス、力の微妙な調整など、全人間的な活動が数多く含まれているのである。ところが現代の子どもには前述の両者から得るべき外界についての直接的・一次的経験が極端に少なくなってしまい、逆にテレビや絵本といった映像を通じての間接的・二次的経験の機会が溢れている。映像や表象の伝える未知の世界の情報は、直接経験によるそれと比較すると、情報量という点では何倍、何十倍であるだろうが、しかし情報の質的観点からすれば、ものの名前や色、形といった表面的なものに過ぎ

ない。映像や表象は意識に対しては確かに明確な在り方をしていると言えるが、反面その実在的性格、存在の重みという点ではまったく頼りにならない。直接経験の過程で営まれる身体的な判断、調整、意志の遂行などの多くがほとんど意識下の水準で、メルロ＝ポンティの言う〈身体図式〉、ワロンの言う〈トーヌス的機能〉といったかたちで、つまり意識の光が届かない次元で為されるのとは対照的である。身体、行動、行動に統一を与える意志――これらの活動は人間の生命的、生物的な層の働きをつかさどっている。それ故、二次的、間接的経験が生活を満たすようになれば、意識は明るくなり、知識は増大するであろうが、意識の基礎にあるべき、人間と存在との無意識的、身体的、生命的なつながりが非常に衰えてしまうことになる。そこから、自らが生きているという実感つまり生命の充実感の喪失という事態が生じているように思う。映像や表象はその存在の持つ生命的価値や感情的価値を捨象し、ただその客観的、抽象的な意味だけを抽出する傾向を有するからである。手伝いが不要ということは、映像や表象を生み出す存在そのものとの生きたつながりを失い、本来は存在との交渉の結果手に入れるべき映像や表象を、いとも簡単に手にするということを意味している。

次に、今日の子どもの遊びの実情はどうなっているのであろうか。路上や空地で子どもの遊ぶ姿を見る機会が少なくなって既に久しい。子どもが彼の自由時間の多くをテレビの前で過ごしていることは、種々の調査によって明らかにされている。テレビの前で過ごす状態を遊びと呼ぶならば、確かに子どもの遊び時間はかなり増加しているに違いない。しかし遊びの質や内容はまったく異なってきているのであるから、遊び時間の長短ばかりでなく、遊びの中味についても問うてみる必要がある。最近では電子ゲームが流行し、今ではそれがパソコンへと移りつつある。つまり遊びといっても昔のように仲間が集まって、とにかく体を動かして全身で打ち込んでいく遊びではない。電子ゲーム機が流行した理由のひとつは「ひとりでもできる」からだと言われている。今の子どもの遊びの主流は、室内でひとりでする遊びである。従って、遊びを通して創意工夫する力を養い、また仲間とのつき合いの仕方を学ぶとして評価された遊びの意義も、遊びの内容がすっかり変わった今では、もはやそのままでは通用しないだろう。事実、遊びの中に気晴し的要素や休息的要素が多く含まれるようになっている。遊びに心身共に熱中し、遊びの中で自らの生命を燃やすような経験の機会が非常に少なくなっているのだ。

要するに今日の子どもは高度に人工化・抽象化された生活環境の中に生きている。手足を動かして手伝うということがない。また遊びも変質して、全人格的に仲間や自然と関わる必要のない遊びになっている。そして子どもの目の前に溢れているのが映像であり、情報である。次から次へと目まぐるしく変化する映像を子どもは彼の頭の一部を使って受け取り、処理していく。恐らくそれは表面的には気楽であっても、神経をすり減らすような、疲れる作業であるに違いない。そこで益々気晴し的な遊び、休息的な遊びが求められるようになるのであろう。幼児の教育目標にあげられている「心身両面の発達」「全人格的陶冶」の言葉とは裏腹に、学校教育では記憶力中心の断片的知識、つまり表象活動が人間の知性を測る唯一の尺度なのであり、子どもの遊びもそれに応じて映像

文化を中心に展開しているわけである。外界との交渉に含まれる感覚や感情、つまり実生活の体験内容が抜け落ち、交渉から抽出された意味だけが数量化、図表化されて子どもの意識の明るみに提示される。ところがその提示された映像を受けとるのも子どもの感覚や感情、知性なのである。外界の直接経験が非常に少なく、それ故あまり開発されることのなかった感覚や感情が映像を受けとるしかないのだ。更に遊び仲間をもたない子どもは、電子ゲームの得点を友だちと比べることはあっても、苦労や楽しみを共に分かち合う共同経験が極めて少ないので、あくまでも自分の感覚、感情、知性を頼りにするしかない。未熟で仲間からは孤立したそれらの力は、ややもすれば一人よがりの妄想にとらわれることになろう。

教育は今、表象を中心とした知的能力よりも、世界を知覚し、心で感じとる力の方をあえて意図的に重視しなければならないのではないか。世界と距離をとり客観的に正しく認識する前に、世界と豊かに交流し合う機会をもっと大事にしたいと思う。それは決して科学以前の世界に後戻りすることではない。物質文明の中で正しく人間的な在り方を維持するには、生命的、生物的な層がしっかりと安定した基盤を築いている必要があると思われるからである。[2] その為には我々の生活の在り方を問わねばならないだろう。

二　科学の発達と個人主義

自由時間の多くを電子ゲームに熱中し、テレビやマンガに釘付けにされる人間（子ども）は、現代の産業の発展に伴う心理社会的情況の流れの中で登場してきたと考えるのが妥当であるだろう。すなわち今日の子どもの姿は、科学文明を今日のような発展にまで導いてきた便利さ、快適さをどこまでも追求しようとする人間の欲望と結びつけるときに初めて、理解できるのではないだろうか。少しでも便利に、快適にという人間の欲望は、次第に自分の手足を動かすことを不要にし、暑さや寒さといった肉体的な不快さを、身の周りの自然的条件を征服することによって、できるだけ軽減しようとする。身体的には快適で、手足を動かすのも最低限のことに限られてくると、意識の表面にあれこれ像を思い浮かべる表象活動の割合が多くなるのは当然である。つまり先に示した人間存在における身体のもつ意味の変化は、人間的欲望の在り方そのものに由来し、文明の発展に伴って最近急に顕在化した現象なのである。主として大脳を発達させることによって動物から大きく飛躍した人類、本能ではなく知性の働きによって判断する自由な存在である人類は、今まさにその大脳活動の結果がもたらした文明によって生存の危機に立たされている。それというのも科学研究自体のもつ人間的価値にも拘らず、科学研究の結果が人類にもたらす便利、快適は人間の上辺の表面的な部分の欲望を満たすように偏ってしまっているからである。機械の構造やそこに用いられている科学法則については無知であっても、ボタンを押しさえすれば我々の欲望を満たす結果が得られる仕組みになっているのだ。この偏りは人類の正しい発展の道筋からの逸脱を示しているのではないか。少しの不快さにも耐えられない体質、目先の欲望に振り回される自我――このようにして現代人は自分の感覚や感情を最も大事にし、

個人的主観性を唯一の判断の基準に採用する。自己を自分の感覚や感情と同一視して、それ以外に自分はありえないと信じ切っている。個性や個々人の存在を大事にするという個人主義が、各人の感覚や感情の満足を第一にするというエゴイズムに置き換わっているのだ。科学文明を生み出した合理性、客観性と、自己の感覚、感情を唯一の基準にする個人的主観性とが両極的な著しい対照を示しつつ、現実生活においては各々物質主義とエゴイズムというかたちでむしろ助長しあっている、そうした図式がここに明らかになるのである。

人間を人間たらしめる大脳の働きが科学文明を生み、それが人間の身体を甘やかすことによって、身体活動のみならず精神活動まで衰えさせてしまったというように、非常に大雑把に捉えると、この悪循環を絶つためには大脳を放棄するしかないであろう。少なくとも身体と精神の二元論の立場からすれば、そのような結論に至るのではないか。しかし二元論こそ科学的思考の基本になっているのであって、感覚的、主観的世界に対して合理的、客観的世界を構成するのが科学の方法であり目的である。[3] 数量化し得るもの、実証しうる合理的なものが尊ばれ、我々の主観や感性、情緒などは科学の領域から排除される。だが世界は客観的世界と主観的世界との合計によって成立するのだろうか。科学的世界が抽出されたとき、世界はもはやもとの姿を保持し得ず、それ故科学的世界のあとに主観的世界が残るのではないのかもしれない。しかし科学的思考の起源が人間存在の在り方自体に見出されるのであれば、我々人類の現代の状態を肯定的に評価し得る唯一の根拠は、現代の個人的主観主義と物質主義そのものの中にしかありえないであろう。その唯一の根拠を次のように考えることができる。

現代人のエゴイズムを単に自己の表面的な感覚や感情に基づく、極めて自分勝手な自己主張と解釈する場合でも、曲がりなりにもそこに〈自己〉の表出を見ることができよう。すなわち集団の中に、例えば家族や地域社会の中に埋没して、集団の掟に従って従順に、だが無反省的に生きる情況から、たとえエゴイズムというかたちをとってもとにかく自分の独自性、個体性を主張する段階を迎え、そこから更に新しい段階へ進もうとしているのだと考えることもできるわけだ。かつての地域社会は、地域の伝統的文化を次の世代に伝えていく、そうした無意図的な教育の場として機能し、子どもは地域社会の中で諸種の学習経験を積み、やがて一人前の成人に成長した。そうした地域社会の存在は青年にとって、良い意味でも悪い意味でもアイデンティティの基盤になるであろうし、自己の精神的故郷の役割を担っている。ところが他方、それによって地域社会は新しい世代を自己の伝統的文化の中に巻き込み、自己保存をはかるという保守的機能も有しているのだ。新しい世代は古い伝統に対して従順である限りにおいて、地域社会の一員に加えられる。人間の欲望や衝動は古い形式にのっとって処理されねばならない。要するにそこでは個体や個人的感情などは抑圧されるわけである。科学の爆発的に発達する近代以前にあっては、人間は神話、伝説、風習といった伝統的価値体系の枠組みの中に自分を適合させるかたちで成長したのである。ところが科学のもたらした合理、実証主義は人間を越えた不可視なもの、形のないもの、神や自然に対する畏れの気持を払拭したのだ。もはや伝統的偏見にとらわれることなく、不可思議なものを怖れず、ただ科

学を信じ、自己の感覚や感情を堂々と主張する。集団の感じ方、考え方に埋没せず、自己の感じ方、考え方を重視できる。つまり科学は主観と客観とを明確に区別することによって今日の物質文明の繁栄をもたらし、それがエゴイズムというかたちをとりながらも人間の自己主張、個体性の自覚を促したとも言えるわけである。もちろんその個体性の自覚は、少なくとも現代においては自己を肯定的に捉えているわけではない。むしろ身体機能の衰え、精神の表象機能への偏りの結果として、自己の生存感の稀薄さ、生活の不充実感に悩まされるという否定的なかたちでの自覚と言うべきであろう。自己の中で身体と精神とが分裂し、各々がバラバラに活動を行うようになると、存在とのつながりを欠いた表象は妄想に、精神的方向づけを欠いた身体感覚は末梢的快楽の追求にと、容易に転化するだろう。それが自己の存在感の稀薄さ、生活の茫漠たる不満感なのではないだろうか。自己が精神活動と身体活動とに分裂し、しかも精神活動は表象活動に、身体活動は五官による末梢神経的活動に縮小して、その縮小した部分にしか自己を見出し得ないとき、我々は初めて自己の個体性に気付くと同時に、自己のあまりにも頼りない有様に愕然とし、強い不安に陥るのである。更にまた他者との共感性、メルロ＝ポンティの言う〈間主観性〉の根拠たる機能を、もはや身体が果し得なくなっているので、我々は自己の孤立感を強く感じるのである。なぜなら人工化、抽象化した環境のもとにあっては身体はもはや自然や他者との相互浸透的交流の場を持たないからである。[4] 個体性の自覚、個人主義の台頭はかくして、ハイデガーが〈世界―内―存在〉として全体的、統一的に捉えた在り方を人間が失って、世界からも他者からも孤立し、表象活動と表面的な感覚や感情とに分散的に収斂する頼りない自己の意識化とも言えるだろう。科学文明の発展による身体及び精神活動の衰退に伴って、我々は頼りない自己の独自性、個体性に気付いたというわけである。従ってこれからの教育の問題は、集団から自立して自己の個体性を主張する傾向、人間の非常に浅い部分の感覚や感情を満たそうとする欲望、白昼夢に堕しかねない表象活動を、いかに人類全体の今後の発展に位置づけ、新しい調和、統一をもたらすかという課題を解決することでもある。

三　原初的知覚体験における一体感

ところが我々の原初的な知覚体験をここで思い起こしてみると、主体と客体との関係は決して互いに明確に区別できるようなものではない。特に幼児の体験は、自分と対象を区別するよりも、自分と対象との一体感の方が優先しているのではないだろうか。そこでは世界を冷静に、客観的に認識する態度ではなく、まず世界や対象との共感が先にあり、五官による認知活動もその共感関係に包み込まれているようである。例えば大人の行動や動物の行動を自己の身体で模倣するときの、子どもと対象との関係を見てみると、子どもは何よりも対象との強い感情的なつながりを持っている。あたかも自己の身体全体が対象と融合したかのように対象を模倣する。それは決して対象の客観的な特徴を捉えて模倣するといった、客観的、表象的態度なのではなく、対象の本質を対象と融合することによって一気につかもうとする、いわば魔術的態度なのであ

る。対象の色、形、行動様式といったものも確かに認識されてはいるが、それらの認識的要素はあくまでも第二義的な意味しか持たず、子どもの対象に対する共感が融合的知覚を成り立たせる中心にある。従って原初的知覚体験においては自己と対象との境界が消失し、自己は無限定的な自己の在り方を示している。共感によって成り立つ世界が極めて限られた、範囲の狭いものであることは言うまでもないが、だが対象との融合によって存在の基盤が充実しているのも確かである。なぜなら単に対象を表象するのではなく、身体を媒介にして存在の次元で対象との関わりを結んでいるからである。言い換えれば幼児の知覚体験は、何よりもまず〈生きている〉という生命の次元の営みなのである。五官で分節的に捉える以前の、自他不可分の、生命と生命の交流の体験である。

未開人の模倣呪術を支える原理も、幼児の原初的知覚体験と同じく、自他の一体感である。模倣呪術は雨をよぶために雨や雲の真似をする、いわば自然と一体化する行為であり、必ずしも自然の脅威から逃れるための一般的法則の発見を目指していたのではない。自然現象の説明や呪術の効果を上げることを目的とするのであれば、分析・綜合の抽象能力が不可欠である。しかし呪術は科学とは別の次元で、分析・綜合によっては説明し尽くすことのできない部分、つまり人間能力を越えた部分を信じ、人間を超えた部分と自分とが一体であることを意識し自覚する行為なのだ。恐らく未開人は自らが人間能力を超えたものの一部であるという強い確信をもっているのだろう。だからこそ呪術に現実的な効果があるかどうかを問題にすることもないのであろう。すなわち彼らには、自らをその一部に含んでいる人間能力を超えたものに対する、疑う余地のない信頼があるわけである。

科学が呪術にとって替わるのと並行して、人類は人間能力を超えたものに対する無条件的な信頼を失い、自然は人間が支配し征服する対象に変化する。幼児もまた人類の歴史の進展と同じように、抽象能力や表象能力を手に入れるのと引換えに、他の存在との無記名的交流の手段を失うのである。またここに、生命の次元から観念の次元への移行を見ることもできる。

我々はここで、先に示した今日の子どもの遊びや生活の特徴を、改めて人類の歴史的発展の中に位置づけて理解することができるのではないだろうか。呪術から科学への移行を可能にしたのは人間の根源的な欲望である。便利・快適を求める欲望の在り方が今日に至って子どもの生活までも根底的に変えたのである。人類の生物学的な特性は、何といっても成人に至るまでの子ども期の長さにある。そしてその長い幼少年期に、子どもは心ゆくまで遊ぶことが一人前の成人になるためにも必要な条件であった。遊びと手伝いを通じて彼は世界に出会い、世界を発見し、世界について学んだからである。ところで遊びが労働から区別されるのは、遊びは効果や酬いを求めない、遊びはその活動を楽しむこと自体を目的とするところにある。酬いを求めないという点で遊びは、その効果を問わずむしろ自然との合一自体を目的とした模倣呪術と通ずるものをもっている。両者とも「気がすめばよい」という性格が強い。また、「我を忘れて遊ぶ」という表現が示すように、遊び活動においても、原初的知覚体験や模倣呪術と同じく、自我意識よりも世界との共感性の方が優先しているのであろう。「我を忘れる」という言葉とは矛盾する

ようであるが、実は酬いを求めず、活動そのものを目的に行う遊びの中でこそ、人はそれぞれ自分らしさ、その人の個性というものを養うのではないだろうか。結果を出すこと、効果をあげることに追われた活動には、その人らしさが生まれて来ない。結果を気にしたり焦燥感を感じたりせず、活動そのものに集中できるとき初めて、自分の独自性、アイデアを生かすだけの精神的なゆとりがあるからである。

ところが今や、世界と共感し、世界について学ぶ絶好の機会である遊びが変質してしまった。科学は人類の歴史において呪術にとって代わったのみならず、ついに呪術的世界に生きるべき子どもから、遊びまでも奪ってしまおうとしているのだ。映像文化に取り囲まれた現代の子どもが気晴し的な遊びで満足しているのは、彼らの遊びへの意欲・欲求がその程度のものだからであろう。かつて「無心」とか「赤子の心」として、その私心、我を離れた在り方が我々の理想とまで考えられた子どもの姿は、もはや無条件に前提できない。瑣末な自己中心的欲望にとらわれず、また偏執を用いずに我を忘れて遊びに熱中するだけの内的衝動が枯渇しつつあると言えるだろう。衝動と言えるほどの遊びへの意欲は、わずかに二、三歳の幼児期前期に残存するのみで、幼児期後期ともなると、手足を動かさずかつ映像文化による直接経験の激減の影響が早くも顕著に見られるのである。人間の表象活動や感情の働きは、生命・生物的現象を下部構造として、その基盤の上に成立しているにもかかわらず、今や上部構造が、下部構造を形成する幼少年期にまで侵入し、生命的基盤を破滅の淵にまで追いつめているのだ。人間の特徴である直立姿勢の不安定化、あごの退化、脚力の低下……と、現代の子どもの生命・生物的能力の信じがたい程の衰弱については枚挙のいとまがない。このような具体的な身体的機能や運動能力の衰えが目立つばかりでなく、外部知覚と内部知覚の融合というかたちで主体が対象と一体化する原初的知覚や模倣呪術においても、内部感覚を構成する均衡感覚や運動感覚といった身体のトーヌス的機能が働かなくなってしまう恐れがある。

かくして人間は世界との複雑で幾重にもわたる結びつきを至る所で失い、自己の内面性の中に閉じ籠り、あらゆる存在から孤立し、自らの身体性までも切り離して、ひたすら表象や抽象化といった自己増殖的活動に専念する傾向にある。

ところで二、三歳の子どもにしか、もはや忘我的な集中した遊びが見られないことについてよく考えてみれば、幼児期前期には未だ明確な自我意識が形成されるに至ってはいない。従ってもともと〈我〉の無い状態なのであるから、「無心」とはいっても、自己を明確に自覚した成人が「童心」に立ち返るのとはまったく異なった体験であろう。問題は我我が自らの自由意志で、この忘我的状態、主体と客体とが未分化で、他の存在と合一した状態を体験可能にし得るかどうかである。しかも幼児の原初的知覚や未開人の模倣呪術と異なり、自己の身体に依存せずにである。いや、少なくともメルロ＝ポンティが記述した〈身体性〉という意味での自己の身体をあてにすることなく、と言わねばならない。なぜなら自覚的な自由意志による自他の合一、生命相互の交流は、これまでの科学的思考の枠組みに納まりきれない身体的機能の働きを明らかにするかもしれないからである。超感覚的世界の認識を追求するルードルフ・シュタイナーの試みは、この方向に沿ったもののひとつに挙げること

ができよう。生命・生物的下部構造が危機に瀕している今日の情況は、その意味で知覚体験の質的発展に基づいた超感覚的世界についての考察を要請しているのかもしれない。

四　自己開発としての幼児の教育

ヨーロッパにおいて確立した〈近代的自我観〉はその後わが国にも輸入され、はっきりと意識されることはなくても現在の学校教育を支える人間観の基礎になっていると言えるであろう。そして近代的自我の確立は地域社会や宗教や封建的身分制度といった伝統的・保守的価値観からの自由の達成というかたちで行なわれた。つまり共同体による自己や個体の呪縛、吸収を自覚し、それから自己を解放するという個人主義的な闘いを通して、近代的自我が確立したのである。工業の発展に伴う都市化現象がその背後にあるにしても、古くからの迷信、錯誤、慣習へのとらわれから人間を自由にしたのは、それらに替り得る世界観を科学が提供したからであろう。科学は可視的、計量的世界の因果関係を明らかにし、普遍的法則を打ち立てる。科学と共に発達した近代的自我が自己自身を、科学が他の対象についてそうしたと同じように、眼に見える、計量されうる対象として理解しようとしたのは当然であるかもしれない。ところが人間を科学の対象として措定的に、つまり自己を実体として捉えようとすると、迷信や錯誤のみならず周囲のあらゆるものから人間だけを切り離し、孤立した存在として客観的に規定することになろう。可視的、計量的領域から人間を説明するということは、一人の人間を他の人間と代替し得る、単なる一つの単位と見做しているわけだ。確かに人間を一般的、客観的に把捉する限りにおいてはそれでよいだろう。しかし教育という視点から考える場合には、一人一人独自な自己が自分の人生をいかに生きるかという立場から人間を理解する必要がある。すなわち感覚、行動様式、精神的傾向といった人間についての外形的、一般的な知識だけでは、毎日の生活を生きる次元での指針としては不十分である。我々の日々の行動の原理として人間の科学的理解、つまり外形的、具体的な実体としての理解を採用するのは、科学の誤った適用なのではないだろうか。あるいは科学の影響があまりにも絶大で、科学以外の他の人間理解の可能性について考える余地がなかったのかもしれない。個人主義がエゴイズムに擦替わる今日の傾向はこのような所に原因があるようにも思われる。

我々が子どもの教育を考えるにあたって、現在もっとも大事なことは、我々が科学の発展過程のなかで達成された共同体における個体性の自覚（個人主義の主張）の段階にとどまらずに、個体の内には実は必然的に他との共存つまり共同体が含まれているという次の新しい自覚の段階へと進むことなのではないか。この新しい自覚は自己を他から隔絶する立場からは現われて来ない。一人一人の独自な自己の内に他と分け隔てることのできない、他と共有しているものが存在するという確信は、可視的、計量的世界を超えた世界にまで視界を広げたとき初めて生まれるだろう。それは日常これが〈自分〉と思っているもの――通常は感覚や気分や感情として意識される自己――が決して孤立した存在ではなく、それこそ無限の諸条件や原因・結果の相互連鎖によって形成されて

いるという自覚である。一見偶然的に思える諸現象の背後に、人間を超えた〈偉大なるもの〉のはたらきを認めることと言ってもよい。自己を含め宇宙のあらゆるものの存在が互いに連鎖の網で結ばれ、我々の思量を超えた秩序のもとにあるとすれば、我々は単に主観的な自己（感覚、感情、気分等として捉えている自己）ばかりでなく、可能な限り宇宙の秩序に沿った自己のあり方を求めねばならない。この偉大なもの、個人を超えた絶対者を何と呼ぼうと、自己が決して自己充足的、限定的なあり方をしているのではないということに気づき、限定的な自己の枠を超えて偉大なものにつながる、より深い自己の姿の発現を目指すところに、実践を導く新しい原理を見つけることができる。

幼児の原初的知覚や遊び、未開人の模倣呪術等には対象との融合が見られるわけであるから、恐らく無意識的にではあっても全宇宙の存在を秩序づける相互作用の連鎖の存在を直観的に捉えていたのであろう。しかし世界との共感を体験する貴重な機会であった遊びを失い、文明の進歩によって孤立的自我意識の強化されている今日の情況下にあっては、我々は自ら意識して主観的な自己にとらわれない生活を試みなければならない。それが真の自己の開発であり、これからの幼児教育の方向を示してもいるのではないだろうか。普通に言われる個性の伸長、自己の開発は主観的自己、近代的自我観の立場に立っている。なぜならそのような場合に意図されているのは人間の極めて具体的な能力、多くは職業と結びついた能力を身につけることであり、それ故人間を外から評価し物象化してしまう傾向が強いからである。そのような教育はつい効果や結果の方を重視することになるだろう。今日に至って外界の自然世界から、他者から、更には自己の身体からも孤立してしまった近代的自我、表象や思考といった知的活動に収斂しつつある主観的自我であるが、我我はむしろこの段階において、自己を含むあらゆる存在を等しく制約する連鎖の構造に気づくのではないだろうか。[5]

自分を生かすというのは決して自他分断を前提とした自己中心的な欲望を満足させることではあり得ないはずである。そうではなく無限の深みをもった全存在の相互連鎖に従った生き方、言い換えれば自己に与えられた独自の役割を十全に果していく、それもその役割に真正面から精一杯取り組む生き方のうちに真の自己開発があるだろう。近代的自我は自己自身の内に在る自他不可分のつながりに目覚めたとき、エゴイズムを超えて更に新しい意義ある生活への内的衝動に突き動かされるのではないか。あるいはむしろ、事実として個人は他のあらゆる存在と不可分であるが故に、個体の自覚が徹底した現代の時代になって、自己（個体）の内の共同体に気づくのかもしれない。

実体的な自我意識の確立する幼児の時期から、我々は自他不可分の無限定的な自己のあり方にも同時に幼児の眼を向けさせる努力が必要であろう。身体を動かさず、遊びを失った映像文化の時代に生きる子どもには、自己の内なる共同性への方向づけが是非とも不可欠なのだ。それがその子どもにとって真の意味での自己開発になるのだから。もちろん教育を担当する我々おとな自身も、内なる共同性への指向を見失ってはならないだろう。親や教師や周囲のおとな達の実践の姿の中に、幼児は彼らに対する尽きぬ共感によって、その実践の原理、意義ある人生を求める真の自己の発現を見るからである。

註

1　現代の子どもの具体的な生活、子どもを取り巻く文化的情況については例えば、深谷昌志「孤立化する子どもたち」ＮＨＫブックス　一九八三、朝日新聞社会部「子ども新時代」朝日新聞社　一九八四、斎藤次郎「子どもたちの現在」風媒社　一九八三、小木美代子編著「映像文化時代の子供達」ＰＨＰ研究所　一九八〇などを参考にした。

2　知的教育に先立って感性や情性の教育を重視するという考え方はルソー、フレーベル、ペスタロッチの頃から数多くの思想家、教育者の示したものである。それにもかかわらず、少くとも公教育においては今でも知的教育への偏りが益々強化されていると言えるだろう。だが他方では学校教育の中に子どもの手仕事や生産的活動を取り入れ、直接経験の機会を生かそうとする試みは、ジョン・デューイの後、今日再び活発になっている。わが国でも外国の諸種のフリー・スクール運動から学んだり、あるいは独自の実践的研究が為されたりしているようである。

3　板倉聖宣「科学と方法」季節社　一九八一

4　主観と客観との、自分と他者との相剋を超越しうる根拠は、後にも述べるように、視覚や聴覚といった外部知覚と姿勢活動、筋肉均衡感覚、運動感覚などの内部知覚とが〈自己の身体性〉の場において結合しているからである。いわば主観と客観の対立を括弧に入れる〈現象学的還元〉の役割を身体が果しているわけである。この自他融合を可能にする身体の機能が今日忘れられようとしているのだ。

5　和田重正「あしかび全集　第五巻」柏樹社　一九七七

本論のテーマである〈自己開発〉の理念は、直接同書から得られたものである。その他にも一つ一つ註を付すことはしないが、気分や感情として五官で捉える主観的自己と、宇宙の全存在の相互連鎖につながる真の自己との人間の二重性については以下の著書等を参考にした。和田重正「もう一つの人間観」地湧社　一九八四、内山興正「自己」柏樹社　一九八三、中村元「自己の探求」青土社　一九八一

原稿受理　一九八四年十一月三十日